

聖書が語る親子関係

2003年 愛児舎懇談会 参考資料



それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、
ふたりは一体となるのである。
創世記2：24

1、聖書が語る親とは、離れて自立し、敬愛する対象である。

- 親とは分離の対象：創世記2：24 「その父母を離れ」
- 親とは敬愛の対象：出エジプト記20：12 「あなたの父と母を敬え」

聖書の家族観：夫婦は一体、親子は別人格（神の創造のデザインに基づく家族観）
日本的家族観：親子は一体、夫婦は他人？（血縁関係、家制度に基づく家族観）

誕生記念品に見る、日本の親子関係と欧米の親子関係の意識の違い。

親を愛し、従うことだけではなく、親から離れ、自立していくことが大切。

親離れするまでの自立期においては、分離と従順の間の葛藤は当然かつ必要なもの。
愛し従うべきと頭では思いつつ、心の底では「うっとうしい」「むかつく」と感じるもの。
むしろ葛藤は健全な成長過程にある証拠。

2、分離なき従順(機械的従順、親の言いなり)の問題

親の言いなりになることは、本当の従順ではない。
言うとおりにしなくても重んじてよく聞く。(後に知るべしの世界)



3、分離による自立があつてこそ、親を本当に敬愛することができる。

健全な親子関係の成長過程

- ①尊敬（幼児期）：幼児期は、親に対して無条件に敬愛。
しかし、それは不十分な現実理解による。
幼児期は、建物に例えると土台を築く大切な時。
親から無条件的な愛を受けるほど、安心して自立していける。
- ⇒②疑問（児童期）：児童期には、欠点や矛盾を持つ現実の親の姿を認識。
幼児期のような尊敬心は薄らぐ。
- ⇒③反発（思春期）：思春期には、親に対して完璧を要求。寛容さを欠く。
過度に批判的。反抗を通しての自己形成。
- ⇒④理解（青年期）：青年期には、親の欠点や矛盾に一定の理解や共感を持つ。
客観性と寛容さを身につける。
- ⇒⑤敬愛（自立後）：自立後には、親の欠点や矛盾を受容。
自ら社会人、家庭人となり、親の敬愛すべき点も発見。